新刊紹介

「火山はすごい－日本列島の自然学」

鎌田浩毅著，PHP新書，
PHP研究所刊，740円（税別），
2002年6月28日第1刷

「火山はすごい」という意表をつくタイトルの本である．このタイトルは「火山のおもしろさを伝えることのおもしろさを伝えたかった」という著者の意気込みからでてきたものらしい．「火山はおもしろい」という気持ちを強調したタイトルである．

本書では5つの火山，阿蘇山，富士山，雲仙普賢岳，有珠山，三宅島を取り上げ，「火山」「自然」「人間」「社会」について著者自身の体験と思索が綴られている．火山を，あるいは火山の科学を紹介した本ではなく，むしろ火山にまつわるエッセイである．文体はわかりやすく，専門用語についても苦にならない程度にさりげなく文中で解説してある．地形図もしくは地質図がないので記述をたどるときに困ることはあったが，一気に読めた．

話は阿蘇山で火山地質学のおもしろさに目覚めるところから始まる．阿蘇カルデラの雄大さと，その阿蘇を題材に手ほどきをしてくれた小野晃司氏（元地質調査所員，故人）の魅力に惹かれて火山地質学にのめり込んでいく著者の話は，熱を帯びている．話はそこから著者が魅入られた阿蘇カルデラの話へと移る．阿蘇山の火山としてのおもしろさは，それだけで一冊の本になるくらいだが，そのエッセンスとなるトピックスを上手に選び，わかりやすく紹介する語り口に，愛するフィールドを持つ地質学者の姿が見える．とりわけ，中岳の活動に関する描写は秀逸で，生きている火山の様子が伝わってくる．

今話題の富士山については，その生い立ちを紹介し，噴火の歴史を紐解く中で，来るべき富士山の噴火，そしてハザードマップと社会との関わりについて述べている．雲仙普賢岳の火砕流と災害は，火山と人間，社会との関わりを考えるとき，欠かせない話題である．ここでは火山としての普賢岳というよりは，そこで起こったことに著者の関心が集中している．火山災害に際しての研究者の役割，社会のあり方などについて著者の見解が展開され，火山観測を行う「火山庁」創設の重要性を説く．有珠山と三宅島についても，現在までに至る火山活動の推移を分かり易く解説した上で，災害について深い関心を寄せる．火山災害は難しい課題である．当然異論もあろうが，何よりも，火山の周辺に住んでいる多くの人が抱いている疑問に，限られた紙面の中で率直に答えようという姿勢には好感がもてる．

全体を読み通してみると，新聞などの報道で出てくる火山に関するトピックスが意識的に取り上げられていることが分かる．読んでいて飽きがこない．しかも，新聞の科学解説記事のように専門家以外の人にも理解しやすいよう，上手にまとめられている．火山国日本では火山災害は避けて通れない話題である．災害を軽減するには，いたずらに火山を恐れ，あるいは甘くみるのではなく，火山活動を理解し，火山災害について思いをめぐらす必要がある．一人でも多くの人の関心を火山に引き寄せるための努力が，ここにはある．ただ，それだけに，本書を契機にもっと深く火山を知りたいと考える読者のためには，次の仕掛けも必要であろう．理屈っぽい話はとかく嫌われがちである．それをおもしろく，わかりやすくサイエンスとしての火山学を多くの人に語り継ぐという研究者，教育者としての仕事を次の本で実現してほしい．

（地球科学情報研究部門　鹿野　和彦）